

講演 5

生協の生鮮品仕入れにおける流通とその安全性担保の仕組みの変化

エフコープ生活協同組合 組合員活動部 組合員活動課

井ノ上 誠 氏

皆さん、こんにちは。エフコープの井ノ上と申します。本日の出席者名簿を拝見し、私では少し役不足かと思いましたが、どうぞ最後までお付き合いください。

エフコープ生協は、福岡県内圏域で活動しており、供給高（事業高）は、609億円となっております。県内55万所帯が組合に加入いただいています。

今回、2019年からの変化点というところに軸足を下ろした説明を、スライド2の順に沿って進めさせていただきます。

まずは、生協の変化ですが、コロナ禍以前と比べたときに、2桁伸長の事業高をつくらせていただいているということです。特に、コロナに入り人との接触を怖がるという傾向がありました。あの時、コンビニエンスストアの面積が狭いということで一番嫌われ、スーパーマーケットよりもコンビニエンスストアの事業高は大幅に落ちた時期となります。その中でeコマース、宅配事業に集中していったということで、生協も2桁伸長になりました。

面白い傾向といえますか、普通、生協に入りたい場合、家庭訪問をして説明するということが従来のやり方でしたが、最近はWebでも加入できるような仕組みを取ったところ、やはり人と接触したくないということで、この時もWebの加入者が今までの3倍ぐらい増えました。瞬間的には1カ月で9割以上がWebによって加入されるという事象が起きました。



我々生協は、私もそうですが、組合員も年を取ってしまっていて、平均60歳くらいの組合員さんになっています。生協が発足した当時の組合員さんがそのまま年齢が上がってきていて、若い層がやっぱり弱い。これが全国の生協が抱えている課題ですが、このコロナ禍で生協に入った層というのが、30代中心となりました。現在こういった加入はだいぶ落ち着いてきていますが、今後の課題として、この若い層をどのように継続して利用していただくかということが、当面の課題となっています。

いいことばかりではなかったです。生協に入られる組合員さんが増えて、おかげさまでかなり利用も増えました。ただ、キャパシティとして、それに応えることができない現象が起きました。

我々生協に事業では、いわゆる宅配事業が8割ちょっと、店舗事業がそれ以外なのですが、配達キャバのところ、まずは配達する人、そ

れから配送トラック、あと後方施設、物流センターというところでピッキングをするのですが、そのキャパ。意外だったのが、システムキャパ。そこら辺をこなすシステムにもキャパシティーがあって、それ以上の件数の受注をすると、システムがパンクしてしまうという状態でした。

当然、取引先である生産キャパの部分があったのですが、この4つのキャパシティーをオーバーすることが見えたため、2カ月間、計画欠品ということで、取り消しをさせていただいた。これも今までで初めての経験でした。せっかく注文したのに物が来ないと。皆さん、お怒りの部分もあったのですが、なぜそういうことをしたのかというチラシをきちんと印刷してお届けしたことで、理解をしていただいた。九州全体で、2週間に18億円の欠品取り消しを行いました。(スライド4)

取引先の変化ですが、コロナ禍での見た目での変化はありませんでした。ただ、SKU、それから仕様の見直しをメーカーとしては結構進められたところが見えてきました。SKUは、小売業界では在庫管理のところで見るのですが、生協は規格アイテムの管理として見ています。例えば、ペンを1本で売る、2本で売る。これは2SKUと言います。そういうかたちでメーカーとしては、生産キャパをいかに効率よくするために、売れていないものを製造中止にして、売れているもののラインを広げていく、そういった作業をメーカーさんが行います。結果として、計画していた商品を製造中止にしたいといったやりとりがバイヤー段階では結構あったようです。

※印で書いていますように、原材料費が高騰している。人・エネルギー・各資材代、あと円安ですね。そういった部分を受けて、仕様内容。例えば、200円で売っているものを、価格をそのままにするために容量を小さくするといった

こと。(スライド6)

ここには書いていませんが、人手不足は大きいですね。コロナ前のところで結構人手不足というのは騒がれていたのですが、我々もそうですね、ピッキングするセンターとか、かなり人手不足であると。物流系も全般そうですね。

それがコロナになって閉店した飲食業の従事者が結構流れてきてくれました。それで一定救われたところがあったのですが、コロナも5類になって、店もオープンしていますので、また人手不足が如実になってきているという状況です。

青果物の変化ですけれども、見た目ではそれほど影響はない、福岡大同青果の代表も以前、このような会合でコロナによる影響は、それほどないという報告をされていたことを記憶しています。ただ、輸入農産物は厳しかったですね。特に、飛行機が飛ばないことで、船での海上運搬が逼迫したと。海上フレートも値上がりしました。

どういったことが起こったかということ、海上輸送用のコンテナが世界中で不足になりました。20フィーター、40フィーターコンテナというのがあるのですが、その殆どが中国で作られています。中国は、あえてそれを増産することはありませんでした。そういったことでコンテナがない、船がないということでした。僕らも輸入果実は、カリフォルニア、オーストラリアから飛ぶのですが、相当抑えました。なぜかという、出港します、入港します、この計画が立たないからです。船も積めるだけ積んで、いろんな港に寄るだけ寄るため、一体いつ日本に来るか分からないという実態でした。だから、日本に入っても、コンテナを開けると、もう腐敗しているとか、そういう現状がありました。しかも、レートがレートなので、相当高い買い物になっているということですので、輸入果実は相当抑えてきた、この3年だったというところですよ。

ここに書いていませんが、カット野菜ですね。これは相当、市民権を得てきた。以前から野菜高騰のときにシェアを高めたのですが、今回、不動産の地位を確定されたと思います。(スライド8)

畜産物は、結構大きく変化したと思うところですが、やはり鳥インフルエンザですね。卵も現在ではスーパーにかなり出回ってきたのですが、見ていくと産地が、いつも置いている産地ではなかったり、サイズがS玉中心だったりといつもと違うようです。暑さのせいもあるのですが、そういったことで卵は価格の優等生といていたものが、これだけ値上がりすることは今までなかったことです。ただ、鳥インフルエンザが発症したのは大変ですが、発症の無かったところはかなり潤った、たまにはいいのではないかと思います。

畜産品全体で見ると、肉食需要が拡大した一方で、外食が減少したということ。それから、輸入依存度の高い飼料を使っている畜種ですね。輸入飼料のウェイトが高いほど、厳しいということ。特に、酪農系は相当厳しいですね。飼料コストが半分を超えると、経営が厳しいと言うが、8割まで占めているところがあります。かなり酪農系は離農が進んでいるところで、厳しくなっています。

先ほど、解題のほうで出ましたが、穀物需要は年々拡大しているということです。西暦2000年と比べると、今で1.5倍穀物需要が増えています。異常ですね。これが成り立っているのは、肥料、それから品種改良、遺伝子組換えなどの技術革新によるところですが、そろそろ限界にきているところかと思えます。

それからウクライナ情勢の反動が穀物の高騰にも繋がっています。一旦、ガクッと下がってきました。ウクライナのものが、一部輸出できるということになりましたので。ただ、今年の7月の段階で、インドがお米・トウモロコシに

輸出規制をかけています。内部のインフレ対策ということなのですが、それもあって後、アルゼンチンの不作だとかで、穀物がかなり高騰してきているということです。意外なことに、米もかなり高騰しています。(スライド10)

水産物は、かなり不漁です。海水温が上がっているという部分もあるのですが、海外の需要は、かなり膨らんできています。良質なタンパク源なので、肉から魚へシフトしている傾向があります。ただ、日本は逆に年々消費は減っているという現状です。日本においては放流事業から養殖事業に徐々に変化していています。

輸入品は、牛肉と同様に買い負けしているのが現状です。あと、ALPS 処理水の海洋放出による中国の対応も含めて、かなり厳しい現状にあると思います。(スライド12)

生協の産直品を管理する産直品質保証システムについて説明します。生協の場合、産直とコープ商品という2つを柱とした組み立てをしているのですが、ここに書いてるように、生協の産直品では、いわゆるGAPですね、適正農業規範と言われてはいますが、これを含む生協オリジナルの管理システムを作っており、全国の生協で運用できる環境としています。これをコロナ禍の間に再構築しようということで、新たに適正水産規範を作成しました。これには、長浜鮮魚市場等へ説明に行かせていただいて、構築に協力いただいたという経緯もあります。

農業規範のところは、国際水準GAPに引き上げました。産直生産者は輸出に耐えうるものをつくっているということです。

それから2006年から運用の畜産編の改訂を実施。というのも、Animal Welfareがかなり台頭してきていますので、そこを無視できないということもあって、改訂。昨日、まさにセミナー

で改訂の報告を実施したところです。

なぜ、こういうことを始めたかという、2002年に食品偽装のオンパレードでした。それから BSE 問題。甲斐先生がプリオン専門委員として参加されていた BSE です。それから、無登録農薬問題。これは全て2002年です。一気に噴出したときです。

それを受けて、生協の組合員が、生協を信頼していたのに裏切られたという感情を抱かせる結果となりました。それまで産地とは信頼関係で成り立っていると思っていました。ただ、信頼関係だけでは駄目で、生産現場の実態を、きちんと見ておかないと、現場での無理が知らぬ間にミスやトラブルの発生につながるということです。生産工程のリスク評価をした上で、管理できる仕組みが必要だろうということで、この生協産直品質保証システムをつくり運用しています。

書いていますとおり、システムの導入目的は3点あります。とにかく組合員の信頼を裏切らないということ。点検するときには生産者とコミュニケーションを取りながら点検しますので、コミュニケーションツールという位置付けにもなっているということです。

あとは、フードチェーンという言葉が出てきましたが、産地があって、流通業者があって、加工業者があって、生協がある。その全ての事業者が品質を担保するためのこの仕組みに取り組んでいます。だから、それぞれの事業者でオーダーメイドの管理システムを存在させているということです。品質を担保するボタンタッチをしているという仕組みになります。

GAP などであれば生産段階だけなのですが、これは各フードチェーン全てを網羅する仕組みにしています。これを策定・運用・管理している団体というのは、世界を探しても、日本の生協だけかなと考えています。作業は大変です。しかし、常に更新し、いいものにしていくという仕組みにしています。畜産 GAP も、日本で

はおそらく生協が初めて作成したと思います。(スライド14、15)

今後、想定される変化として簡単に書いていますが、やはり2024年問題は相当きついなと捉えています。我々もそうですが、物を仕入れて販売するという立場上、その仕入れの部分がかかりタイトになってくるのではないかと。もし、対応しなければ、物流量が現在の65%まで下がるだろうと言われていますので、配達業者の配達の拘束時間、輸送距離を含めて制限されますので、配達員が足りないことは目に見えているため、そこをどうするかという、人をまた雇わざるを得ない。ただ配送業者、低賃金で人が来るわけないとすると、賃金を上げないと駄目。それを換算すると、配送コストというのは1割から1割5分ぐらい上がらないと、おそらく無理ではないかと考えています。

ヤマト運輸は、1日長いシフトをすでに運用しています。例えば、明日到着のものは、明後日に届くということになる。だから、市場関係は結構大変です。ただ、ベジフルの場合だと、あそこはかなり最新鋭の設備なので、きっちり冷やし込みができる。だから、長くなった分、冷やし込んで、輸送、搬送できる場所は良いのですが、それがないところは厳しいかと。ヤマト運輸も、軽い荷物というのは日本郵便に委託していますから、それも2024年を睨んだ対応としてやっているなというところです。

市場のところで見ると、先ほども報告がございましたけれども、買付品が増加していくと利益率が低下して、市場経由率が低下していくことがあるのですが、そこら辺が如実に表れるのが地方市場。地方市場は、ここ10年で2割ぐらい閉鎖になっていますね。僕も若い頃は、農産担当として地方市場に結構行った記憶があります。僕が当時、行っていた市場は、もうどこにもないですね。五十川(市場)も移りまして、西部も統合されたし、マルキタはあるけ

れども、西山市場は無くなったみたい。賑わっていてよかったのですが、少し寂しいなと個人的に感じているところです。

後は、生産者の高齢化がありましたけれども、うちの生産者もそうですが、保有面積を狭くせざるを得ない。技術をあまり掛けられなくなるということで、品質に影響が出てくるということで、これはプロとして出せない、道の駅などで見て買ってもらう方に、変化させるであとか、そういった部分でいうと、影響を受けるものは必ず出てくるのかなと。

最後に、近年の天候異常が恒常化し、デリバリーが寸断されることを考えていくと、これは


昔からよく出ていることなのですが、リスク分散した産地形成が必要ということが言われています。北海道だけに依存するのではなく、例えば、関東甲信越辺りの大きい団地、九州であれば熊本辺り、というところを含めたリスク分散でやっていく必要があると。これは、課題が相当あると思うのですが、やることで将来が一定、リスク分散ができるのかなと考えています。(スライド17)

以上になります。ご清聴ありがとうございました。

中村学園大学流通科学研究所
第18回国際セミナー

第2部：「生協の生鮮品仕入れにおける流通と
その安全性担保の仕組みの変化」

2023年9月8日 中村学園大学
エフコープ生活協同組合 品質保証推進スタッフ 井ノ上 誠



1

2019年からの変化点として

- 生協の変化
- 取引先の変化
- 青果物の変化
- 畜産物の変化
- 水産品の変化
- 生協の産直品での変化
- 以降想定される変化

2

生協の変化

40年ありがとう。
もつとわくわく エフコープ
40TH Anniversary

3

生協の変化

2019年度と2022年度の数値上の変化
供給高・供給剰余ともに2桁伸長という結果
コロナ禍当初の宅配需要増加に伴い、生協加入者が増えたことが主因と思われる
ただインフレ影響から商品単価UPによる影響もあることから、手放して喜べる数値ではない
※生鮮品の消費者物価指数は今年に入って二桁の伸びとなっている

4

5

取引先の変化

5

6


取引先の変化

この間、仕入先が変化することはありませんでした。
ただメーカーサイドでは製造品仕様見直しとSKUの絞り込みを実施
※原材料費/人件費/エネルギー経費等のUP・円安等から仕様内容
の再検討や価格見直しは今後も継続中。

6

7

青果物の変化



7

梨園町 馬鈴薯畑 photo: EJRI

8

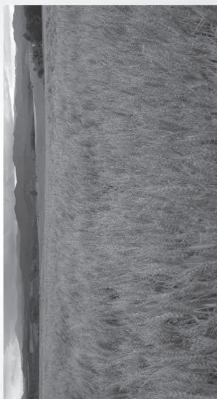
青果物の変化

農産品では、国内生産への大きな影響は無いが、輸入品については円安・海上フレート上昇と合わせて、外国での強いインフレと景気の良さから、日本への輸入は厳しい実態。輸入しても到着予定は立たず、着荷段階での腐敗も多いことから生鮮農産品は尙社自身が敬遠傾向にあった。一方顕著な変化としてはカット野菜が市民権を得た。

8

9

畜産物の変化



士別町 麦畑 photo: EIJIRI

9

10


畜産物の変化

畜産品では、鳥インフルエンザがつかつてなく発生したことから、卵生産量に大きく影響し高騰。
畜産品全体では内食需要の急拡大で伸びた一方、外食需要は減少。また輸入依存度の高い飼料コスト高騰が飼料コストウエイト高い畜種で経営を圧迫。
輸入品は円安と海上フレートの影響から牛を中心に高騰、消費は高価な畜種を避ける傾向にシフト
生産地では飼料の国産化への関心が高まっている。

10

11

水産品の変化



美瑛 白金草い池 photo: EIJIRI

11

12

水産品の変化

水産品では、総じて天然物の不漁傾向は継続するも、海外での需要は拡大傾向にあり、日本においては放流から養殖に徐々にシフト傾向にある。ただし頼りの輸入は牛肉と同様に「買い負け」。合わせて、ALPS処理水の海洋放出による中国（香港含む）等の対応が厳しい。

12

13

生協の産直品での変化



北竜町ひまわりの里 photo: E.JIRI

13

14

生協の産直品での変化

生協での、この間の特長的動きのひとつとして産直品（生鮮）の事業継続を目的とした品質保証システムの構築と改訂に着手し強化。

- ① 適正水産規範：（2020年新たに構築）※養殖及び天然魚を対象に
- ② 適正農業規範：（2022年改訂）※国際水準GAPへ
- ③ 適正農業規範畜産編：（2023年改訂）※AWIに関する新たな指針も参考にこれら生協の産直品質保証システムと合わせて統一フォーマットを作成しています。

14

15

生協の産直品での変化


生協産直品質保証システムの目的
本システムの導入目的は、以下の3点です。

- ① 組合員にたしかな商品を提供し続けるための強固な基盤を創り上げるために、生産者、流通事業者、生協のコミュニケーションの体系を検証可能で強固なシステムとして構築していくこと。
- ② 生産者、流通事業者、生協が協力して点検活動を行うことにより、他者の目を通じて自らの到達点と課題を明らかにするとともに、PDCAサイクルに基づいてそれぞれが改善のための実践を継続するための指針を提供すること。
- ③ すべての生協がひとつのシステムでまとって取組むことにより、システムの標準化を図り、本システムを合理的、効率的に運用するとともに、組合員にお届けする農畜水産物の品質管理レベルの向上と標準化を図ること。

15

16

以降想定される変化



菜球の蕎麦畑 photo: E.JIRI

16

17

以降想定される変化

- ・2024年問題：働き方改革関連法によって2024年4月1日以降の施行により、運送業界は恐らく人手不足と運賃上昇を招く事となる。特に青果物において敏感される傾向が顕著に表れる可能性が高い。
- ・市場での買付品増加による利益率の低下と市場経由率の低下
- ・生産地の高齢化に伴う生産量減少と品質への影響
- ・日本列島を分割しリスク分散した産地形成（地域での）

17

18

ご清聴ありがとうございました。



18

土別町そば photo: EIJRI